
$$1 + 1 = \infty$$

雨月わかば

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

1 + 1 = ∞

【Nコード】

N 8 1 3 8 A

【作者名】

雨月わかば

【あらすじ】

男子高校生と少年の出会い。変わって行く日常。そんな2人の、普通よりやや斜め上に行く生活。

2 - 1 〓 1人暮らし

「出てってくれない？」

今日この言葉を、実の母に投げ掛けられた。

別に親子仲が悪いわけじゃない。
むしろ良い方だと思う。

しかしながら、母の新しい旦那候補が子供嫌いらしい。

高校生である僕を子供扱いするのはどうかと思うが、こんな事を考えてしまう時点でまだまだ子供なのだろう。

「生活費はちゃんと出すし、住む所も用意してあるから安心なさいな」

爽やかな笑顔でそんな事を言う母に、少々呆れてしまった。

「高校はどうすりゃいいのさ」

中退して働けとでも言うのだろうか？

「行けばいいじゃない？金銭面で苦労はさせないわ」

そう言ってウィンクをする母に、溜め息が出るばかりだった。

2 - 1 + 1 Ⅱ 賑やかな二人

「ふう……」

新しく住む部屋を整理し終え、フローリングの床に寝転がる。

蝉がはしゃぐ程の暑さの中、日陰に位置する床は、ひんやりとしていて気持ちが良い。

結局、僕は家を出て行く事に同意した。

最初は、それが親の言う事か？などと思ったが、母の言葉の解釈の仕方を変えてみた。

つまり、

「生活費は出してあげるから、一人暮らししてみなさい」

という事だ。

……そう言う事にしておこう。

そんな事を考え、少し落ち込み始める僕の耳に、来客を告げるチャイムの音が届いた。

しかしアパートへの来客など、勧誘やセールスの類がほとんどなので、いきなり玄関の扉を開けてはいけない。

そんな、雑誌で読んだ知識を思い出しながら、のそのそと体を起こし、玄関のインターホンに繋がるスピーカーをオンにする。

「どちらさまで？」

『あゝ、彼方だ。取りあえず開けてくれい』

僕を警戒させてくれた来客者は、友人兼幼なじみである彼方で、対セルスマン用話術を思い返していた僕は肩透かしをくらった。

一人暮らしの事はまだ話していないので不思議に思ったが、取りあえず彼方を部屋に通し、適当に座らせる。

「にしても、真理ちゃんも相変わらずだな」

と、苦笑気味に話し出す彼方。

ちなみに真理ちゃんとは、僕の母の事だ。

母は『おばさん』と呼ばれるのが嫌いで、彼方には小さい頃からそう呼ばせているのだ。

「って事は一人暮らしの事、母さんから聞いたのか？」

「ああ。いきなり携帯に電話してきて『優ちゃんには家を出てもらったから、面倒見てあげてね』だよ」

と、今度は爆笑しながら話す彼方。
本当によく笑う奴だ。

「僕が家を追い出された理由は聞いたか？」

「んにゃ、聞いてないけど大体見当は付くよ。男関係だろ？」

さすが、長年一緒に居た奴はよくわかってらっしゃる。

「まあそんなとこだ」

苦笑しながら答える僕に、彼方は『やれやれ』という風に肩を竦めると、テーブルの上に一升瓶を置いた。

「つーわけで、一人暮らしの御祝いに酒盛りでもしよーぜ」

これは御祝いでいいのか疑問に思ったが、酒盛りは嫌いじゃないので、二人で酒を注ぎ合い乾杯をした。

2 - 1 一人ぼっち

「でもま、良いところで良かったじゃないか」

日本酒を注いだコップに口を付け、部屋を見回しながら言う彼方。

「広い部屋三つもあるし、エアコンも付いてるし、必要な物があれば何でも買ってくれんだろ？愛されてるねえ」

それを聞き鼻で笑う僕。そんな僕の態度に不満を覚えたのか、彼方が続ける。

「いや冗談抜きにしても、真理ちゃんの良い母親だと思うぞ？」

「良い母親が、息子に対して『彼が子供嫌いだから出て行け』なんて言うのか？」

「それは真理ちゃんだからしょうがない」

彼方はそう言うと、日本酒をぐいっと飲み干す。

まあ、それを言われちゃぐうの音でもない。

今までの母の奇行を考えれば『あの人だから仕方がない』で片付けられるのだ。

小さい頃など『彼が来るから』と言う理由で、よく彼方の家に預けられていた。

まあ、それを受け入れる彼方の両親も変わり者だと思うが。

そんな益体のない話を続け、窓から見える景色が夜に染まり始めた頃には、一升瓶も空になっていた。

「んじゃ、そろそろ帰るわ」

そう言いながら立ち上がる彼方。

「ん？泊まっていくんじゃないのか？」

酒なんか持って来るから、てっきり泊まっていくと思っていた。

「いや、これから彼女と待ち合わせなんだ」

これから？

こんな時間から何をするのかとも思ったが、敢えて聞かない事にする。

なんか悔しいから……。

「酒飲んでるんだから気を付けろよ」

「ばーか、こんぐらいの量じゃ水飲んだのと変わんねーっての」

確かに彼方は酒に強い。僕より飲んでた癖に、全然素面だ。

でもまあ、高校生の台詞ではないと思うが。

「んじゃま、また来る」

そう言つて、彼方は部屋から出て行つた。

広々とした部屋に静寂が戻る。

家……今では実家と言つべきだろうか？

ともかく母と暮らしていた時は、母が騒がしかったため、こついつた静けさは少し寂しくなる。

…いや、こんな事を考えるのは酔つてゐる所為だ。

僕は頭を軽く振り、酔い覚ましに散歩をしようと、玄関から外に出た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8138a/>

1 + 1 = ∞

2010年10月10日05時16分発行